

公開講演会記録

日本の伝統話芸 講談の世界

講談師 宝井琴柑



国際善隣協会様にて、平成三十年九月二十七日講演いたしました内容を、補足をしつつ、ここにまとめたいと思います。

一、まずは講談の概要を申し上げます。

●講談の歴史、演目数など。

五百年の歴史をもつ、日本の大衆話芸。張り扇（はりおうぎ）で釈台を叩き、パパンという音を響かせて調子良く語ります。講談をする人のことを、講談師、または講釈師と言います。

●嘘を、面白おかしく語ります。

「講釈師 見てきたような 嘘をつき」「講釈師 扇で嘘を 叩き出し」歴史に残る物語や有名人を語りますが、もとの話をアレンジして、面白くしていきます。嘘とわからず本当の出来事のように聞こえるのも、話芸の妙。

●話の幅は広い。

平安時代、戦国時代、江戸時代、明治時代などの日本の出来事から、外国の歴史、最近のニュースや小説まで、なんでも講談になります。講談の演目の総数は、約五千。

昔から語られてきた演目は「古典」、最近作られた演目は「新作」と、分類されます。

講談師が自分で台本を書くことも多く、脚本家と語り手を兼ねます。

●伝統の世界。

師匠に入門すると前座修行をし、二つ目、真打と昇進します。現在、宝井、一龍斎、神田、田辺、桃川、旭堂という流派があります。講談師は全国に約八十人います。



師匠の宝井琴星と琴柑

師弟関係は、実の親子を越えるほど、深いもの。単純に芸を教わるだけでなく、講談師としての生き方を、師匠という存在の背中を見て学びます。

師匠は無償で芸を教えるかわりに、弟子は師匠に尽くします。

二、皆様にも、講談ミニ体験と称して、声を出していただきました。

「善隣」読者の皆様も、また参加された方も復習がてらに、音読してみてください。

間にパンパパンッと机を叩きながら、声を出しましょう。実際に声を出して調子をとれば、気分爽快。すっきりします。

「半鐘」

半鐘は、ジャーン。ジャーン。

ジャーンは火事が遠くにある時。

ジャンジャンジャンジャン…は近くにある時。

ジャージャーは、避難する時。

ジャジャジャジャーは、ベートーベン。

三遊亭円朝原作「牡丹灯籠」

(おつゆ)「しんざぶろうさま、しんざぶろうさま」

(しんざぶろう)「あつ、お前はおつゆ、どうして入ってきた」

(おつゆ)「しんざぶろうさま、私をうらざりましたね。」

お恨みに存じます。しんざぶろうさま、あなたが憎い、

でもやっぱり恋しい、しんざぶろうさま」

(しんざぶろう)「ゆるしてくれ、助けてくれ、寄るな、わあ〜」

三、入門したきっかけについて。

講談師になったきっかけを聞きたいと、委員の方に、あらかじめリクエストをいただいております。まずは、講演ではお話しなかった幼少の頃。

自分でまとめました講談台本がありますので、載せておきます。

講談調に仕立てていきますので、こちらもよかったら、音読してみてください。

時は昭和の終わり、ロッセアイス雪見だいふくが発売され、千葉は船橋にららぽーとが開業した頃。

神奈川は横浜で産声を上げましたのが、講談師宝井琴柑でございます。

未熟児として生まれつき、赤ん坊に似合わず骨と皮ばかりに痩せこけ、貧相で、

「まるで鳥がらのようだ」「怪獣の子どもに見えるわ」と親は顔を見合わせましたが、はえば立て、立てばあゆめの親心、なんとかかんとか成長いたしまして、小学校に入学いたしました。

運動はからっきしだめ。ぜんそくもちの虚弱児童。背の順ではいつも一番前。

「遅いなあ。なにとろとろしてんの」。外で遊ぶにも、足が遅い。すばしっこい友達たちにおいていかれてしまう。

ぼんやりとした、おとなしい子どもでしたが、ところが、ある日のこと。

国語の時間。「はい、次の人」と先生に指されますと、席から立ち上がって、教科書を読みあげる。

「おれはあれからずっと考えていたが、どうもそりゃ、人間じゃない、神様だ。

神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんぎつねは、「へえ、こいつはつまらないな。おれが、くりや松たけを持つていつてやるのに、そのおれにはお礼を

言わないで、神様にお礼を言うんじゃない、おれは引き合わないなあ」と思いました。

と、『ごんぎつね』の一節を読みあげますと、わっと拍手がきた。

「はい、上手に読めましたね」と先生にもほめられる。目だたない子どもでしたが、この時ばかりは輝いたのです。

こうして、声に出して読むことの面白さに気がつきました少女は、いよいよ、講談教室へ通うこととなる。果ては講師になろうと決意をするわけでございますが、それはまたの機会に申し上げることといたしまして、梅檀は双葉より芳し、蛇は寸にして人を呑む、と自分で言ったりや世話はございませぬ……。

「琴柑講師への第一歩」の一席。

というわけで、今読んでいただきました台本は、「三分講談」と称し、講談教室や講談創作教室で創作の手本として配布しているものです。

教室では「自己紹介や、日常の身の回りのできごと、あるいは世間のニュースなどを、三分の講談に仕立ててみましょう」という課題を出しています。古典ばかりでなく、身近な話題も講談に仕立てられる、そのことをレクチャーし、楽し

んでいたいています。

と、ここまでは、講演では触れなかった私の子ども時代のエピソードでした。

成長した後に、大学を出て、出版社に入社。書籍の営業マンをした際に、「営業トークも話芸だ」と思い立ち、どうせ話芸をやるならば、と、中高生時代にアマチュアとして習った講談の道へと転向したので。

わずかな期間ですが、一般社会で勤める経験をしたことは、良かったと思っています。どんな業種も、どんな職種も、それぞれに大変なことがある。楽な仕事はない、と身をもって知ったことで、特殊と言われがちな現在の仕事でも辛抱ができます。

一般社会で手堅く働くことを続けられなかった自分なのだから、講談の世界が最後の砦。腹をくくって生涯の仕事にしようと思えるようになりました。

四、講談界の現在、琴柑の現況など。

独演会「きんかんよみ」を、二つ目に昇進して以来、主に上野広小路亭やお江戸日本橋亭にて続けています。独演会は自身で主催しているため、企画から、金



バイオリンデュオ ミオストリングスと講談の競演

銭面や集客も、大変に骨の折れるものですが、自身にはっぱをかけて、続けていきます。

お客様に楽しんでいただけますよう、ゲストは寄席の範疇を越えて、多彩な方々をお招きしています。

前項でも、創作講談について触れました。

今、いただいているお仕事は三分の一ほどは、創作してほしい、あるいは持ちネタの新作講談を披露してほしい、といった依頼です。

琴柑の持ちネタの一端をご紹介します。まず、琴柑書き下ろしオリジナル作品、師匠琴星の作、文学作品など原作のあるもの、と成り立ちは異なりますが、大きな区分で「新作」と呼ばれている演目です。

「満洲引揚げの密使 丸山邦雄」(国際善隣協会様にご依頼いただき、制作、発表したもの)。

「エルトゥールル号の遭難 山田寅次郎の足跡」

「世界のホンダ 本田宗一郎伝」

「アルミニウム産業の夜明け」

「山本周五郎糸車」

「横浜のヘボン博士」

「ベートーベン」

「あんぱんを食べた次郎長」

「倭建命」

「伝説のボクサー白井義男伝 三部作」 など。

他に、なれそめ講談、企業講談、お身内の方の半生、なども請け負って制作・ご披露しています。

また、私が力を入れている仕事の一つに、子どもにも講談という文化を伝える、

講談を教える、というものがあります。学校訪問や、おやこ講談教室を積極的に開催しています。

今年二月には『おやこで楽しむ講談入門』(彩流社)も刊行し、三月の出版記念講談会には、国際善隣協会様の会員の方もお運びくださり、またこのたびの九月の講演会にても販売させていただきました。



おやこ講談教室、荒川区では毎月開催

小学校中学校にての講談教室の開催は、入門時、故六代目宝井馬琴(琴柑の大師匠)の郷里、静岡県内での活動について回ったのを初めとし、現在まで、全国各地で開催しています。学校訪問では、主に小学校高学年を対象とすることが多く、低学年に講談は難しいと考えていました。一方で、体験会で講談に夢中になった子どもたちが、継続して学べる場がないことを残念に思っていました。どこかに拠点が作れないものか、長年の想いがありました。

その想いを、ほうぼうで口に出していたところ、ようやく近年、糸口ができたのです。友人の紹介で子育てサークルにて、幼稚園児から小学校一年生を対象にした体験会を開催。

これまでは小学生でも高学年を中心に教えていましたので、こんなに小さな子たちがどうかしら、と不安でした。未知の分野だったのです。ところが、やってみてびっくり。子どもたちが、とても良い反応を見せてくれ、初回の体験会は大盛り上がり。講談が、新鮮なパワーを発揮し、親子に響いたのです。

体験会後も、教室として毎月レッスンを継続することになり、一年半が経ちました。

まだ字もあまり読めない三歳・四歳・五歳児が、耳で覚えた講談の文句を語り、張り扇を打つ姿には、父母はもちろん、見学に来た祖父母も感激しきり。

この成功例で、私も自信がつき、ノウハウも着実に蓄積しています。おかげさまで、低年齢を対象にした「おやこ講談教室」の拠点が、少しずつあちこちにでき始めています。

今のところ、子どもの分野ではあまり収益は出ませんが、講談という文化を絶やさないため、未来の講談のため。

この子たちがきつと将来、お客様、あるいは講師師になってくれる！と期待を込めて、活動しています。

「こういうことをやりたい！」と口に出していれば、実現できるものであることを実感しました。これまで講談とは縁の薄かった子育て世代が、講談の魅力を理解してくれたのも、嬉しいことです。

また、子どもたちの純粋に講談を楽しむ様には、毎回、新鮮な発見があります。創作を教えてもいないのに、詩のようなオリジナル台本を作ってきた一年生もありました。

それから、講談の仲間との会で芸を磨くことも、ありがたい環境です。



「女流講談会なでしこくらぶ」毎月開催

講釈場、定打ち（じょううち）小屋、などと呼ばれる、講談専門の寄席が一軒もなくなってしまう現在、修行の場は自分たちで作らなければなりません。

講談協会が毎月主催している「講談定席」の他、「なでしこくらぶ」、「連続講談勉強会」、「新鋭講談会」などに、私は出演しています。先輩、後輩、と肩を並べて、切磋琢磨しています。

九月の講演では、締めくくりに「那須与一 扇の的」をお聴きいただき、質疑応答をしてお開きとなりました。

「どのようにして声を鍛えるのか」など、皆様より多くのご質問を賜りました。おかげさまで、来年の秋に真打昇進し、五代目宝井琴鶴を襲名することが決まっています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（2018年9月27日・公開フォーラム）

筆者略歴（たからい きんかん）

神奈川県横浜市出身。山形大学人文学部卒業。講談協会所属。本籍は埼玉県飯能市。10月21日生まれ。てんびん座B型。中学生の頃より、宝井講談修羅場塾にて講談に親しむ。平成18年4月、宝井琴星に入門し、6月に前座となる。平成22年6月、二つ目に昇進。東京都内の各寄席や、各地の地域寄席に出演のほか、講演や講談教室の講師もつとめている。平成30年2月『おやこで楽しむ講談入門』（彩流社）を上梓。平成31年10月、真打昇進予定。